

〔書評〕

上田 博著 『石川啄木 抒情と思想』

木 股 知 史

本書は、単著としては、『啄木 小説の世界』（一九八〇・九 双文社出版）、『石川啄木の文学』（一九八七・四 桜楓社）に続く、著者の三冊目の啄木研究である。啄木短歌の考察を中心にした「I 短歌・へいのち」の光景、小説や評論についての小論と、近親者・同時代者の啄木回想についての書評を集めた「II 啄木から啄木へ」、研究史についての論や啄木研究書の書評を集めた「III 啄木への道順」の三部からなり、著者の啄木研究の到達点を示している。著者は、「小さな本」（「あとがき」というが、これまでの啄木研究の成果を総括するとともに、新たな展望をも示す充実した啄木論になっている）。

著者が「短歌を中心にしてまとめてある」（「あとがき」というように、「I 短歌・へいのち」の光景）の「II章『一握の砂』・『悲しき玩具』の断層」に収められた短歌評は、本書の核をなしているが、短歌研究・評釈のあり方について、いくつかの重要な暗示を与えてくれる。詩歌の研究はむずかしい。対象と距離をとりすぎると詩歌の生命を取り落とすし、つきすぎると個人的な

鑑賞にせばめられてしまう。著者が採用したのは、鑑賞と研究の境界を往復できる評釈という方法である。歌の成立にかかわる事実の解明とありうべき理解を示す鑑賞を、一首一首の歌について積み上げてゆくというのが、ふつうの評釈のあり方だが、著者の採った方法は、独特のものである。関心の核にある一首の歌をまず取り上げるが、やがて散策するような調子で多くの関連歌についてふれながら、はじめの一首がふくむテーマが生み出す波紋のあたりを讀者に提示するのである。一首一首の評釈の積み重ねは、一首の歌をそれだけで完結していると限定してしまえば、必ずしも歌集のモチーフの総体をとらえるとはいえないという思いが、著者にはあるのかもしれない。「人生の相（すがた）」、「都市の感受性」、「いのち・自然」、「人間の悲しみ」という四つの視角からスライスされた、啄木の二つの歌集の切り口の「断層」から、表現としての短歌のテーマの広がりがとらえられている。

たとえば、「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」という『一握の砂』の冒頭歌は、「大きな実在の世界」

と「小さな私的世界」の対照、「小さな私的世界」に縛りつけられ、身動きもままならぬ自己の人生のありように涙する、悲しみの歌と読むことができる」とされる。こうした理解は、従来の評釈の積み重ねを変更するものではないが、興味深いのは、そこにいたる過程である。土井晩翠の詩「詩神」や、蟹を詠んだ鉄幹の「泡ふきて、横さにわしる、蟹の子も、世をいきどほる、友にやあらむ。」や、逍空の「いきどほる心すべなし。手にすゑて、蟹のはさみをもぎはなちたり」という類想歌が参照されている。また、「東海の小島」は、日露戦争期の啄木が「日東詩美の国」と呼んだような、高揚するナショナルリズムの表示ではなく、「淋しい孤影を感じしめる東洋の一小島」に変容しているという時代的な屈折も、見逃されずにとらえられている。こうした視線からは、日露戦後文学としての啄木短歌の特質がよく見えるようになる。著者は、「明星」派に共通する感傷の大きな身ぶりは、冒頭歌において「より大きな視点」を用意しているとも指摘するが、感傷を外から見る二重の視線による独特の抒情の出発点にふさわしい一首であることが了解されるのである。

猪野謙二が「時事詩的短歌」ととらえた、「やとばかり／桂首相に手とられし夢みて覚めぬ／秋の夜の二時」という一首には、抑圧的な時代の悪夢や誇大妄想ではなく、「時の権力者を風俗化」してみせる視線が読みとられる。そうした理解にいたる道筋には、いくつもの補助線が引かれる。たとえば、正宗白鳥の上司小剣宛の書簡のなかの、夢で桂首相が仁左衛門に変身したという記述を

起点にして、当時の文士と政府の関係がたどられる。また、「ニコボン主義」という桂太郎の懐柔術の世俗的評価のあり方に筆が費やされるといった具合である。著者の評釈の結果に異を唱えることは可能だが、著者が結論に至る過程で示したいくつもの補助線は、一首の歌がおかれた時代の表現の場を広がりのあるものとして提示しており、一義的な解釈を争うのではない開かれた評釈を実現しているのである。

気儘な散策に見える著者の評釈態度は、一見、とても主観的な作業に見えるが、じつはたいへん堅固な方法意識に貫かれているように思える。評釈が受け取ることのできたことを整理してみよう。

①短歌は表現である。すなわち、歌は、一定の事実の組合せとしての状況下に制作されるが、背景となる伝記的事実に還元してしまうことができない。評釈は、事実をおろそかにはしないが、あくまで歌を表現としてとらえるという作業である。

②一つの表現は、他の表現とさまざまな関連しながら、時代の表現の場をかたちづくっている。多くの類想歌を参照し、表現の志向性の共通点を取り出すことによって、表現の価値の核心とともに、文学史的な場が見えるようになる。

③一義的な解釈を示すことが、評釈という作業の最終の目的ではない。重要なのは、評釈の結論にいたる過程である。その過程を明確に示すことによって、一つの解釈がはらんでいる多面的な可能性を開くことができる。

こうした前提は、表だって主張されることはないが、散策に似た著者の評釈の態度を背後で支えているように思う。「放たれし女のごとく、／わが妻の振舞ふ日なり。／ダリヤを見入る。」を取り上げた「夫婦の情景」という一節は、たゆたい揺れつつ進む評釈の醍醐味を味わわせてくれる。著者には、すでに、「啄木「ダリヤ」の歌ノート」(一九八二・一一「啄木文庫」3号)というすぐれた小論がある。「放たれし女」の解釈としては、従来、「解放された女」と「追放された女」の二説が対立しているが、前者がとられ、ダリヤを詠み込んだ類想歌が丁寧にとられ、「かつては友人のうちにも恋のライバルのいたわが妻が、病と貧窮の家にあつて、つかの間の華やいだふるまいをする」という「私解」が示された。本書の「夫婦の情景」は、かつてのこの小論をふまえているが、さらに立体的にこの歌のはらむ問題性を浮き彫りにしている。まず、補助線として、与謝野鉄幹、晶子夫妻の夫婦関係にかかわる歌が検討され、夫婦や家庭に対する視線の表現された啄木の歌が対比され、男と女の願いの方向のずれが取り出される。次に、「放たれし女」の対義となる「囚はれたる婦人」が依存している「囚はれたる男子」にふれた社会主義の言説が紹介され、家庭にある女性と働き手としての女性の立場の分裂に苦しむ晶子の社会意識のあり方につなげられる。また、「放たれし女」の向こうに〈新しい女〉の姿が遠望される。

著者は、「女」を狭い空間に閉じ込めているのは何か(誰か?)という問いは、「問い自体に単純化があつて、二重に応答困難な

問いである」という。「へ女」はそれ自身へ女であると同時に、〈男〉を内部に抱え込んでおり、「へ男」は同様にへ女を内部に抱え込んでいる」という著者は、この一首に夫の「視線の屈折」とともに、妻との距離を自覚し、理想からの落差も知悉した「孤独な内的語らい」を読みとっている。啄木の内的ドラマが時代の方に開かれながら、微細にたどられていて、「放たれし女」を「追放された女」ととり、男性原理の時代的限界を読みとるような割り切った理解より、ずっと陰影に富んでいる。

このほか、歌集論としてもいくつか重要な指摘がなされている。「古典の慰め」のセクションでは、『一握の砂』の「秋風のころよさに」の章の歌が取り上げられている。唐詩、『万葉集』、『源氏物語』といった古典の影響が具体的に指摘され、古典による「いのちの遍在する宇宙、いのちのながれ」の再認識という理解が示されるが、「秋風のころよさに」の章の配置の意味について、一石を投じるものである。また、「人ありて電車のかなかに唾を吐く／それにも／心いたまむととき」といった日常詠の背後に「崩落しつつある意識の世界の深淵」をさぐる一連の試みは、折口信夫や福田恆存がつとに指摘した平明に見える啄木短歌の深さをとらえようとしている。篠弘や太田登の業績をかたわらにおけば、平明な深さという、啄木の抒情のパラドクスナルな構造が、かなり明晰に見透せるようになったといえるだろう。

「序」として「詩人の日露戦争」という、啄木の日露戦争をめぐる転向体験にふれた小論が収められているが、思想的な把握

についての著者の関心のあり方を示している。序と本文にずれを感じ、読者もいるかもしれないが、著者にとつての思想的な把握とは、概念の枠組みによる判断をいうのではなく、本書の中心にある短歌評釈にみられるような、感覚の深さを時代の表現の場になかでもとらえる作業のことをいうのである。著者は、別の小さな文章（「抒情」の運命、世界のゆくえ）一九九四・一〇「国際啄木学会会報」第六号）で、「感情」に拠って、「抒情」に拠って、近代の、近代主義の毒を洗い流す」ことを提言している。本書は、著者の啄木研究の到達点であるとともに、「感情」の復権という視角からの、明治ロマン主義のとらえ直しという作業の出发点でもあるように思う。

上田 博著『石川啄木 抒情と思想』（三一書房 一九九三・三
四五〇頁 三九〇〇円）

（きまた・さとし 甲南大学文学部教授）